

ランバス一家と上海(1854-1921)に関する考察

趙 怡

関西学院の創立者 W. R. ランバス (Walter Russell Lambuth, 1854-1921) が、アメリカ人宣教師の両親の赴任先だった上海で生まれ育ったことは知られているものの、一家と上海についての研究は、管見の限りあまりない。W. R. ランバスの生涯に関しては、彼の友人でもあったウイリアム・W・ピンソン著『ウォルター・ラッセル・ランバス』(Walter Russell Lambuth, 1924, 半田一吉による日本語訳は2004, 以下『伝記』と略す)が主な根拠となっているが、¹⁾上海での活動は殆ど書かれていない。

近年の研究として神田健次は『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉞脈』(2015)の中で、南メソヂスト監督教会の中国宣教の経緯について、以下のように紹介している。

1846年に南メソヂスト監督教会は、第一回総会において、開国間もない中国での宣教開始を決定した。1848年ベンジャミン・ジェンキンスとチャールズ・ティラーの家族とが中国に到着し、1852年までに中国教区が設立された。1854年にJ・W・ランバスが中国の上海へ宣教師として赴任し、同年ウォルターが誕生した。1877年にはウォルターが、米国の大学を卒業後デジー・ケリーと結婚し、中国へ出発し、医療宣教に従事した。上海郊外に麻薬中毒療養所

1) 現在一般に入手できる伝記が数種類あるものの、主な出来事はほぼピンソン著に拠っている。

を開設し、また蘇州や北京などでも医療宣教を展開している。²⁾

以上が日本で知られているランバス一家と上海との関わりりの概要だが、詳細は不明である。中国では南メソヂスト監督教会によって設立された蘇州博習医院（第一人民医院の前身）や「東呉大学」（蘇州大学の前身）の歴史が多少知られているものの、ランバス一家についての研究は行われていない。それを踏まえて、小論では上海で刊行されていた英字新聞や関連書物の調査を通して得た史料（ランバス親子自身の記録を含む）に基づいて、現地の歴史背景とも照らし合わせながら、ランバス一家の足跡を辿ってみたい。

一 初めての上海

1 上海への赴任

W. R. ランバスは、1854年11月10日、2ヶ月前に上海に着いたばかりの、J. W. ランバス (James William Lambuth, 1830-1892) とメアリー (Mary Isabella McClellan Lambuth, 1832-1904) のもとに誕生した。『伝記』によると、J. W. ランバスはミシシッピー州の出身であり、その父も宣教師だった。息子が生まれた際に「一梱の綿」と共に国外伝教の宣教師として「主に捧げ」たという。やがて開拓者たちにもまれるように成長したJ. W. ランバスは牧師になり、中国伝道への呼びかけに応じた。メアリー・I・マクレランは、ニューヨークの名家の生まれで、職を求めてミシシッピーに来たが、宣教師大会で、献金箱に「五ドルと、私自身を捧げます」と書いたカードを入れたという。1854年5月に若いカップルはニューヨークを出発した。³⁾ それにしても、身重でありながら、小さな帆船で大西洋、インド洋を回る数ヶ月にも及んだ航海に耐えた母親の逞しさは、若さの賜物だっただろうが、胎児の生命力の強さも予告

2) 神田健次『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉄脈』関西学院大学出版会、2015年。4-5頁。年号は漢数字から算用数字に改めた。以下同じ。

3) ウィリアム・W・ビンソン著、半田一吉訳『ウォルター・ラッセル・ランバス』関西学院大学出版会、2004年、21-28頁。以下『伝記』からの引用・言及は文末に頁数を明記し、注を省略する。

している。

上海到着後の活動について、『伝記』からは「城壁で囲まれた町の中の教会」での説教の様子や、「屋形船で遠出」する程度の件しか確認できていない（35頁）。ところで、J. W. ランバス本人は、宗教専門誌 *Chinese Recorder and Missionary Journal* (1868年に福州で創刊、中国語の題名は『教務雑誌』) に「アメリカ（南）メソヂスト監督教会のミッション概況」（1875年6月12日執筆）を発表し、以下のように述べている。

U. S. A 南メソヂスト監督教会のミッションは1848年、上海で、F. B. ジェンキンズ牧師とチャールズ・ティラー牧師（神学修士）（二人とも妻と子供を同行させた）によって始まった。上海に到着した後、彼らはまず東城門の外に位置する Wong-ká-mo-der に一軒の中国家屋を借りた。その後上海城の北側、現在はフランス租界として知られている地域に西洋式の家を建てた。ドクターティラーは中国語を話すことも書くこともよくできる人であり、数年間のうちにネイティブ並みに話せるようになった。

彼はここで5年間を過ごし、現地民に伝道と医療を行ったが、1853年、妻の病気のためアメリカへ帰らざるを得なかった。ドクタージェンキンズも、やはり妻の病気のため、ドクターティラーより2年早く、すでにアメリカに帰っていた。彼の妻は帰国途中に亡くなり、セントヘレナ付近の海に葬られた。ただドクターティラーが中国を離れるとき、W. G. E. カニングム牧師はすでに上海に来て布教活動に加わっていた。1854年5月、ミスタージェンキンズが彼の2番目の妻、ジョン夫人とともに中国に戻る時、3組の若いカップルが同行した—— S. ベルトン牧師夫妻、アラバマ州出身、D. C. ケリー牧師（神学修士と博士）夫妻、テネシー州出身、そして J. W. ランバス夫妻、ミシシッピ州出身。一行が古き良き「エアリアル」号（今は上海のアヘン運輸船になっている）に乗り、ニューヨークを離れようとした時、中国から戻ってきたドクターティラー一家に出会えた。私たちはケープ半島を回り、長い船旅を経て、1854年9月17日によく上海に到着したが、街は戦と混乱の真っ最中にあ

り、上陸してすぐに砲声が四方八方から聞こえてきた。都市はすでに反乱者の手に落ちていた。⁴⁾

南メソヂスト監督教会（中国語では「監理公会」）中国宣教部による『中華監理公会年議會五十周年記念刊』（1935年、以下『五十周年記念刊』と略す）に

も、ティラーの日記抄訳と教会の歴史についての説明が含まれる。それによると、1848年4月28日にジェンキンズとティラーの両家族がボストンから出発し、8月に香港に到着したものの、ジェンキンズ家は夫人の病気で香港に留まり（翌年5月に上海到着）、ティラー家のみが9月に上海に赴任。彼らはまず「王家碼頭」に中国式の家屋を借りて住み、翌年5月にジェンキンズ家が合流した後、近くの土地を買って家を造った。また「鄭家木橋」にも土地を購入して150人を収容できる礼拝堂を建設し、「福音堂」と名付けた。女学校と二つの小学校も開設した。1851年に小学校の国語教員、劉竹松とその息子が洗礼を受け、初めての中国人教徒となった。劉はのちに助手となり、常に布教活動に同伴した。2人の宣教師の中国語もおそらく彼から教わった。その後2人の宣教師が帰国し、ランバス一行が上海についた頃は、すでに太平天国の乱により学生たちは田舎に逃げ、教会の財産も奪われ、劉竹松も布教活動を辞めていた頃だったという。⁵⁾



図1 「鄭家木橋」に建てられた「福音堂」、右にはティラー牧師らが建てた住宅。のちにランバス一家の住居になる

4) J. W. Lambuth, Sketch of the American (South) Methodist Mission, *Chinese Recorder and Missionary Journal*, 1877, No. 8-4, pp. 314-315. 日本語訳は筆者による。以下同じ。

5) 毛吟榭「中華監理公会小史」『中華監理公会年議會五十周年記念刊』（出版社不明、1935年。上海図書館所蔵）、2頁。

2 戦と混乱の中

上海は略称「滬」、別称「申」、元は長江デルタ地帯に位置する漁村であり、1267年に華亭県上海鎮が設置され、1292年、華亭県から分離し、上海県に昇格した（この年は上海誕生の年とされている）。1553年、倭寇来襲を防ぐために城壁が作られ、初めて県城が完成された。以降一地方商業都市として発展したが、アヘン戦争（1840-1842）によって開港された。

1843年11月、上海の開港を宣告した初代イギリス領事バルフォアは、1845年、上海「道台」（上海県の長官）と第一次「土地章程」を結び、黄浦江のほとりに約0.56平方キロの土地をイギリス人居留地として「租借」した。「租界」の始まりだった。1848年、アメリカ租界（英租界の北側、呉淞江対岸の虹口一帯）、翌年にはフランス租界（英租界の南側、洋涇浜の対岸一帯）もそれぞれ設置された。1851年に太平天国の乱が始まり、1853年3月、南京が占領されて首都「天京」と定められ、9月よりその一派の「小刀会」が上海県城を一年半にわたり占領した。2万人に及ぶ難民が租界に流れ込み、英米仏の居留民たちは義勇隊を編制して対応した。1854年にイギリス領事オールコックが「第二次土地章程」を公布し、「巡捕」（警察）の設置、三国領事による「租主」会議の招集、および行政管理機構としての「工部局」の設置を定めた。それにより、租界が「華洋分居」から「華洋雑居」に変わり、ほぼ中国政府の管轄下から離脱したのである。

J. W. ランバス夫妻が上海に到着したのはすなわちこの年であり、上海県城が「小刀会」に占領されている最中だった。J. W. ランバ



図2 1855年の上海地図。南から県城とフランス租界、イギリス租界

スは「小刀会」を「反乱者」(insurgent)と呼んだが、太平天国はキリスト教から影響を受けた組織であり、欧米諸国も始めは彼らを利用する思惑があり、租界の中立を宣言し、使節団も派遣して交渉を試みた。しかし第二次アヘン戦争(1856-1860)により天津条約と北京条約を締結し、キリスト教の信仰・布教の自由、外国人の国内旅行の自由などの権利を獲得してからは、太平天国軍の殲滅に助力する側に回った。

太平天国の滅亡(1864)までの10年間、上海と周辺地域は長年続く戦乱によって疲憊し、租界には難民が大量に移入した。建物は急造された簡易なものが多く、劣悪な衛生条件により1862年にはコレラと赤痢の大流行も起きた。その年に千歳丸で江戸幕府に派遣された日本の貿易団一行(高杉晋作・五代友厚などが同行)も、城外の租界の繁栄と城内の民衆の貧困を目の当たりにしたが、乗組員にも感染者が多く現れ、数名の死者を出すほど、この厄難に巻き込まれた。

中国の戦乱に続き、アメリカにも南北戦争(1861-1865)が起り、国からの経済援助が無くなったため、宣教師たちにとって上海の生活環境は過酷だった。J. W. ランバースによると、ミッション開始からの27年間、総数8名の宣教師が家族を帯同して上海に赴任したが、妻や子供を亡くしたり、本人まで亡くなったりして、1875年6月の時点で布教活動を続けたのは、Y. J. アレン(1860年赴任)とJ. W. ランバースの二人のみになっていた。⁶⁾ランバース家も1859年、メアリーがニューヨークにある実家に2人の子供を預けて一旦上海に戻ったが、2年後、夫妻は共に帰国し、一家はミシシッピーに戻った。そこで娘ジャネットを猩紅熱で亡くし、新たにノラを授かった。そして1864年、中国に戻る時には、南北戦争により交通が寸断されていたため、中国人を含む4人の子供を抱えた一家は、悪質な兵士に襲われる恐怖に怯えながら、馬車と牛の引く荷車で何ヶ月もの長旅を強いられたという(『伝記』42頁)。なおその時に夫妻が同行させた中国人の孤児、曹子実は、のちに牧師となって帰国し、蘇州の病院と学校の仕事を手伝った。

こうして上海赴任からの10年間は、苦難の連続で命懸けだった。それに耐えて生

6) J. W. Lambuth, *op. cit.*, p. 315.

き抜いた一家の精神力の強さは、その後の生涯を支える原動力になったに違いない。

二 上海の記憶に残った「藍柏先生」と「藍柏太太」

1 教育、医療と布教活動

中国で行われた布教活動は、貧しい人々への教育、医療活動から始まるケースが多く、南メソヂスト監督教会も例外ではない。上海に来た最初の宣教師ティラーは医者でもあり、到着早々医療を行うことで現地の人々の信頼を得て、「戴医生」（「戴先生」）として親しまれていた。J. W. ランバスが証言したように、言葉の達人でもあった。J. W. ランバス夫妻



図3 J. W. ランバス夫妻が開設した最初の男女共学の小学校。木の下に立っているのがJ. W. ランバス

も努めて中国語（上海方言を含む）を学び、中国語で布教活動を行っていた。宣教師の多くは中国語名を使用し、J. W. ランバス夫妻も「藍柏先生」と「藍柏太太」（「太太」は奥様の意）として知られており、布教と共に現地の教育と医療に尽力した。

『五十周年記念刊』によると、「藍柏」夫妻は、第一陣の「泰右」（ジェンキンズ）と「戴先生」が造った礼拝堂と学校を継ぎ、1868年、「老北門穿心街」に女子学校、「東新橋」に男女共学の小学校をそれぞれ開設した。授業料を免除しただけでなく、食宿費も無料にした。1870年、「鄭家木橋」に「女培養書塾」も開設し、女生徒は裁縫・織物・料理の勉強も求められた。のちに上海近辺の南翔や、蘇州などでの布教活動も、まずこうした無料の「女培養書塾」の開設から始まった。それが人気を呼び、布教活動の展開に伴い、学校建設もますます発展を遂げたという。⁷⁾

監理公会女子部による中国での活動も、「麥克萊（マクライ）女史がアメリカ国

7) 周承恩「中華監理公会教育工作」『中華監理公会年議會五十周年記念刊』、29頁。

外布教会議での募金リストに「5ドルと私自身」を書いたことから始まった」という。「藍夫人」は上海に着いてすぐ、「戴医生」が作った女学校を継ぎ、太平天国の乱により一時中断したものの、その回復と発展にも尽力した。また友人が装身具などを売って得た資金を使い、「三一堂女塾」を作った。布教活動の傍ら、学校の仕事や、病人の看護などに没頭した。⁸⁾

記念刊には「監理公会重要西宣教師伝略」も含まれており、冒頭の二編はすなわち「藍柏先生在華史略」と「藍柏太太事略」である。夫妻の教えを受けた黄夫人の回想などによるもので、前述した業績のほか、二人が温厚誠実な人であり、自宅を礼拝室や教室として開放し、病人を自ら看病したこともあって、周りに「耶蘇人」と呼ばれていたなどの内容が記されている。

1868年以降、J. W. ランバスは上海の周辺都市への布教活動も始めた。水路の多い江南地域ならではの船を利用したり、または手押し車で荷物を積み、徒歩で旅をしながら、江蘇省の蘇州、常州、松江、太倉、無錫、宜興、嘉定、昆山、常熟と、浙江省の杭州、嘉興、嘉善などを回った。距離は25から150マイルに至るにもかかわらず、彼は頻繁に出かけ、時には一年に何度も同じ町に行った。これらの地域は太平天国の乱により人口が激減したが、早いスピードで回復している。住民が7割も消えた常州には北方から多くの住民が移住してきたため、方言も変化した。そして1875年までに彼らは以下の成果を得た：チャペル5カ所、支所3カ所、教会4カ所、中国人の神職者が5人、うち一人は牧師資格を得ている。洗礼を受けた者は成人75名と子供24名、計99名に上り、教会に行く者は男性40名、女性20名、計60名がいた。現地の人々の寄付額は年間10～15ドルであるが、多くの人には貧しすぎて何も寄付できていないと、J. W. ランバスは報告している。⁹⁾

2 現地の英字新聞に報じられた J. W. ランバス家

1869年、「第三次土地章程」の頒布により、上海租界は司法、立法、行政がほぼ

8) 周承恩「本公会女子部前期工作史」『中華監理公会年議會五十周年記念刊』、19頁。

9) J. W. Lambuth, *op. cit.*, pp. 315-316.

独立するに至り、外国人居留民の「自治」による植民都市となった。1860年代以降になると、住宅の建設と道路・ガス・水道の整備が進められ、教会と学校のほか、劇場、公園、博物館などの文化施設も多く造られ、西洋式の生活基盤はほぼ完成された。その前後に外国語の新聞や雑誌も多く創刊され、中でも英字新聞 *The North China Herald* (1850-1940, 『北華捷報』、以下 *NCH* と略す) と *The North China Daily News* (1850-1941, 1945-1951, 『字林西報』、以下 *NCDN* と略す) は居留民社会の政治、社会、文化生活の全般を報道する、最も重要なメディアであった。そこからも、ランバス一家の痕跡を辿ることができる。

関西学院大学図書館が所蔵する *NCH* のデータベースに Lambuth を入力したら、141 もの項目がヒットした。1 番目はすなわち上海到着を証明するものであり、1854年9月30日の「船舶情報」欄の到着旅客リストに、J. W. ランバス一行の名が確認できる（船は9月16日に到着）。時間と紙幅の制限で一つずつ確認することができないが、例えば、1872年8月31日の長崎・兵庫などからの到着者リストに「J. W. ランバス牧師と娘」、翌年7月12日の横浜への出発者リストにも「ランバス夫人と二人の子供」の記録が見られる。また1875年4月15日の横浜行きと、1876年6月17日の日本より到着のリストにも、J. W. ランバスの名前がある。すなわち一家は、当時上海在住の外国人居留民と同様に、日本への旅行も経験したようであり、晩年の日本行きは見知らぬ土地への赴任ではなかったと思われる。

記事としては、120人を収容できる新しいチャペルがJ. W. ランバスによってオープンされたこと (*NCH*, 1874年9月19日)、J. W. ランバス邸にて東方への伝教ツアーのために来訪したマーヴィン (Marvin) 監督を歓迎する集会が開かれたニュース (*The Shanghai Courier & China Gazette*, 1876年12月22日) などが挙げられる。日本を訪問し終えたマーヴィンは、中国を経由してインドへ行く途中だった。南メソヂスト監督教会の日本伝教は1886年に始まるが、その前に日本が既に関心の範囲内にあったことが窺える。またランバス邸は上海の宣教師たちにとっていかに重要な存在だったかということも分かる。

三 「藍柏」から「藍華徳」へ

1 「鄭家木橋」で過ごした日々

上海の外国人居留民の住所録にあたる*The North China Desk Hong List*（「字林西報行名録」）によって、ランバス家の住居が「鄭家木橋」にあったことも確認できる。橋は英米租界（1863に合併して共同租界に）とフランス租界の境となる川にかかったものであり、県城にも近い。この界限は、英（米）・仏・中三方の統治から逃れるごろつきが集まり易く、アヘン館や娼館も多く、治安の悪い地域だった。1870年代以降、租界の拡張に伴い、上海の西側に西洋式の住宅街が多く建設され、西洋人だけでなく、裕福な中国人も競って豪華な邸宅を建てて移り住んだ。しかしランバス一家は「鄭家木橋」に住み続けた。

「藍華徳」こと W. R. ランバスがここで過ごしたのは、誕生から1859年（5歳）までの幼年期、1864年（10歳）から1869年（15歳）までの少年期、そして1877年（23歳）から1881年（27歳）までの青年期、計14年ほどに上る。^{10）}この間の詳しい記録はまだ見当たらないが、『伝記』によると、両親の方針により、彼は中国人の子供たちと混じって育ち、中国語も流暢に話せたという。父親は城内の教会で説教をしている時や、手押し車や船で上海の郊外や蘇州まで伝道活動をしに行く時も、幼い子供を同行させることがしばしばあった。小さな子供がいると中国人も

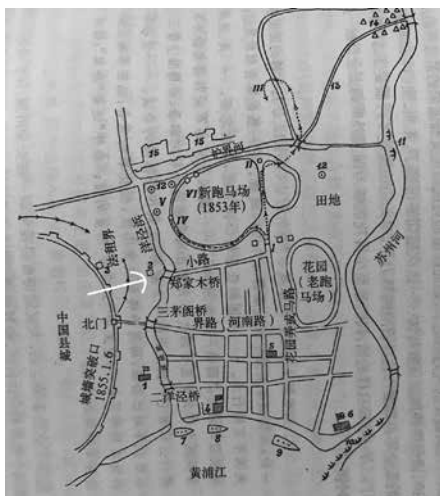


図4 「鄭家木橋」にある礼拝堂とランバス家の位置（左が南、1850年代）

10) 関西学院学院史編纂室「ウォルター・R・ランバス略年譜」、半田一吉訳『ウォルター・ラッセル・ランバス』、324頁による。

喜ぶというが（35頁）、江南一带の人々の温厚な気風と、常に現地の言葉で笑顔で布教活動を行った父の姿勢が、敵意を軽減させただろう。

このような両親のもとで育ったウォルター少年は、自然に中国の人々との距離が近かった。また数度アメリカに渡り、ハイスクールと大学教育をそこで受けた。遙かなる東洋の未知で「遅れた国」から来た若者は、同級生から好奇の目に晒され、来て早々、寄宿舎に案内されるはずだったのに、墓地に連れて行かれたこともあった。それでも進学したエモリー・アンド・ヘンリー・カレッジでは学生YMCAを立ち上げ、初代会長を務め、数々のメダルを受けて卒業。さらにヴァンダビルト大学で神学と医学を修め、トップで卒業した。¹¹⁾ 上海出身で中米双方の言語と文化を身につけた少年は、高い教養と行動力を有するエリートに成長した。

2 上海・蘇州での医療・伝道活動

1876年、初代牧師（Student Pastor）に任命され、「医療伝道」を決意した W. R. ランバスは、翌年に新妻のデージー・ケリーを連れて中国に戻った。早速上海近郊の南翔でアヘン中毒療養所を開設し、また蘇州で病院を開設する計画も立てた。それを実現するために1881年に再び渡米し、ニューヨーク・ベルビュー大学病院とロンドンのエディンバラ大学で最新の医学研究に従事した。翌年友人のパークと中国に戻った W. R. ランバスは、1883年11月に蘇州で「博習医院」を開設した。この設備が良く近代的な病院について、中国語の『申報』も詳しい記事を掲載している。「藍華徳」と「柏楽文」（パーク）医師をはじめ、曹子実ら6人の中国人の助手が診療に当たり、医学生の募集も予定されている。内科、外科、眼科、手術室、病室のほか、アヘン中毒治療所も設置されている。資金は主に募金によるものであり、現地の中国人も多く支出したことが報告されている。¹²⁾

若き宣教師たちは、病院の仕事や布教活動の傍ら、文化交流にも尽力した。当時

11) 同注10)。

12) 陳松盧「游博習医院記略」『申報』1883年11月20日、3頁。なお中国語の「医院」は日本語の「病院」にあたる。

の英字新聞から以下の情報も得られた。1880年1月、W. R. ランバス牧師は、英語を話せる中国人の上級クラスのために、「上海ディベートクラブ」を結成し、1月15日の夜に初のディベート大会を開き、9人が出席した。討論のテーマは「ペンは剣より強い」。一人は肯定側、二人が否定側として即興で発言することが要求された。このや



図5 右は大学を卒業した時のW. R. ランバスと母、妹ノラと弟。左は晩年のノラと娘夫婦一家。後ろにW. R. ランバス夫妻とパークの遺影が掛かってある。

り方は中国人の若者には大変新鮮であり、みな楽しんでた。次週も行われる予定であり、より多くの参加者が期待できるという。¹³⁾ディベート大会は関西学院の伝統行事であるが、その原点は、ここにあったのだろうか。また1883年4月に蘇州の宣教師たちの読書会に参加したW. R. ランバス博士は、ベネチアについて講義した。その歴史から、現在の事情、建築、美術などに至って語られた内容は大変興味深く、大いに聴衆を喜ばせたという。¹⁴⁾ いずれも地道に農村地域を歩き回った父とは違う世代の、若き教養人としてのウォルターの一面が窺える。

なおパーク(W. H. Park, 1860-1927)はのちにW. R. ランバスの妹ノラと結婚し、ランバスが病院を離れた後、院長として中国の医療と教育に生涯を捧げた。多くの宣教師が犠牲になった義和団の乱が起きた時も蘇州に留まり、「柏好人」(善人)として敬われたという。¹⁵⁾1926年10月16日のNCHには蘇州の人々が夫妻の結婚40周年を祝う記事も見られる。翌年春に退職して帰国したパークは、その年の冬に亡くなり、遺骨は蘇州に運ばれ、城外の安楽園に埋葬された。パークとノラの娘

13) *The North China Daily News*, January 17, 1880, p. 55.

14) *The North China Herald*, April 11, 1883, p. 399.

15) 「柏楽文医生活略」『中華監理公会年議会五十周年記念刊』、56-57頁。

は中国人と結婚し、5人の子に恵まれた。

3 中国の近代化と宣教師たちの役割

キリスト教の中国伝来は7世紀に遡るが、初めて大きな影響を残したのは、16世紀に始まるイエズス会の中国宣教だったことは、周知の通りである。中国の伝統文化を尊重し、中国語を学び、中国服を身に纏い、対話路線の方針を採用したマテオ・リッチらの宣教師たちは、多くの庶民、士大夫、および朝廷の信頼を勝ち取った。彼らは中国にヨーロッパ文明を導入したと同時に、ヨーロッパにも中華文明を伝え、いわば東西文明の邂逅をもたらした立役者となった。しかしその融和的な宣教方針はドミニコ会などの反発を呼び、やがて中国人カトリック信者の祖先祭祀を禁止する教令をローマ教皇が発した。それは康熙帝、雍正帝の反感を呼び、最終的に乾隆帝の禁教令を招いた。対してプロテスタント・キリスト教による中国伝道は、1807年に広州にやってきたロンドン伝道会の宣教師ロバート・モリソン（Robert Morrison, 1782-1834）によって始まったものの、禁教政策のもとで広州、マカオ、マラッカなど制限された範囲の中でしか活動できなかった。開港地での伝道活動ができるようになったのはアヘン戦争の後だった（カトリックの伝道活動もそのごろ再開）。

しかし、砲艦外交とアヘン貿易と並行して行われた伝道活動は、当然国民の激しい抵抗に遭う。加えて第二次アヘン戦争の勃発と英仏連合軍の北京占領、キリスト教の影響を受けた太平天国に対する列強の対応の変化なども、朝廷と国民の不信感を増幅させた。天津・北京条約によって中国での布教権を勝ち取ったものの、戦乱が絶えない中、迫害を伴う反キリスト教運動（「教案」）が頻発した。宣教師たちの対応としては、中国の伝統文化を認めず軍事力をバックにして一方的にキリスト教を強要する者もいれば、政府や外交の力とは距離をとる者もいた。またかつてのマテオ・リッチのように、儒教や伝統文化を尊重かつ「容認」する者も現れた。

対して列強の砲艦によって門戸を開かれた清王朝は、中華思想の優位性を固持したものの、1862年に即位した同治帝のもと、太平天国の鎮圧に勲功をあげた曾國

藩や李鴻章らを中心とする「洋務派」を重用して体制の立て直しを図る「洋務運動」を始めた。列強諸国の助力も得ながら、近代海軍の建設と軍事工業を始める一方、全国各地に新式学校を建設し、科学・軍事・翻訳などの人材を育成した。租界を有する上海は、当然「西学」の中心地となり、語学学校と翻訳機関の広方言館と、軍事工場の江南製造局には多くの宣教師が務めた。それに伴って新しい新聞雑誌も多く創刊されるようになり、J. W. ランバスも、1875年に「美華書坊」という印刷所を開設し、上海方言による週刊誌『副音新報』(1878.3-1879.2)と『基督徒新報』(1880.11-1881.3)



図6 美華書坊の前にいる J. W. ランバス

を創刊した。¹⁶⁾ 息子の方も「新約聖書を中国語の上海方言に訳すのを手伝い、一時期は中国語の新聞の編集にもたずさわ」り、父の仕事を助けた(『伝記』、264頁)。

この時期に至ると、伝道活動を超える、キリスト教を基盤とする西洋近代文明の導入によって中国の知識人を啓蒙しようとする宣教師も現れた。上海で J. W. ランバスと共に南メソヂスト監督教会をリードしてきたヤング・アレン (Young J. Allen, 1836-1907) は、まさに代表的な一人だった。「林樂知」という名で知られているアレンは、広方言館と江南製造局での翻訳と英語教師の仕事を通して中国のエリート知識人と接し、西洋の知識と文化を伝授することは、宣教活動の最も有効なツールだと考えるようになった。彼は各国の地理歴史と科学関連の書籍を計13種翻訳したほか、西洋近代の事情を紹介する『西国近事匯編』の編集も担当し(1874-1881年計8巻)、高い評価を受けた。またキリスト教信者向けに創刊した『教会新報』(1868-1874、週刊)の編集方針を改め、1874年より『万国公報』と改名し、幅広い読者向けに国際政治、海外事情、国内問題をテーマにした文章を多く掲載し

16) 『中華監理公会年議會五十周記念刊』挿絵説明、及び王立新『美国伝教士与晚清中国現代化』天津人民出版社、1997年、356頁による。

た。洋務運動を積極的に推進する、最も代表的な中国語新聞となった『万国公報』の執筆陣には、主筆のアレンのほか、イギリス・バプテスト教会のティモシー・リチャード（Timothy Richard, 1845-1919）や、アメリカ長老会が派遣したギルバート・レイド（Gilbert Reid, 1857-1927）などもいて、彼らが寄稿した論説は、のちに清末の変法維新運動を推し進めた康有為、梁啓超らの中国人知識人に大きな影響を与えた。¹⁷⁾

アレンは中国の学校教育にも大きく貢献した人物として名を残している。

彼の指導によって創設された上海中西書院（1882）、蘇州博習書院（1884）。1870年曹子実と J. W. ランバスが作った小学校から発展したもの。東呉大学の前身）、中西女塾（1892）などは、いずれも著名なミッション系学校として多くの人材を送り出したのである。

1884年、W. R. ランバスは蘇州の医療伝道をパークに託し、一家は北京に移った。そこで中国の YMCA を設立し、新たな病院（のちのロックフェラー病院、現在の北京協和医院の前身）の開設にも尽力した。そして1886年8月1日、ランバス親子は中国宣教部アレン総理宛に連名で辞任願いを提出した。その理由はアレンとの伝道方策の不一致や人間関係のもつれなどにあると言われるが、¹⁸⁾ 本格的な病院建設と教育事情に尽力した W. R. ランバスの活動を見ると、むしろ社会事業や教育事業を重視するリベラル派のアレンから大きな影響を受けたとも思われる。ただ日



図7 『中華監理公会年議會五十周紀念刊』に紹介された「林樂知」「藍柏」「柏樂文」「潘慎文」(F.S.Parker)

17) 王立新『美国传教士与晚清中国现代化』第6章などを参照。

18) 『関西学院百年史・通史編1』関西学院発行、1997年、49-52頁を参照。

本伝道の意義を認めつつも、国土や人口、そして重要性においては中国と「比較にならない」故に、日本伝道は中国伝道の妨げとなつてはならないと主張するアレンに対して、¹⁹⁾ランバス親子は日本という新天地を開拓することに魅力を感じていたかもしれない。

四 上海から日本へ

1 日本にいるランバス一家に関する報道

アレンの主張は、渡辺裕子が指摘したような、「中国伝道は、イエズス会のごく最初の時期を除いて一貫して極東伝道の中心に置かれていた」歴史の反映である。「歴史的、文化的に中国から様々な影響を受けていた隣接地域は、中国伝道の射程の延長上に位置づけられ、日本のプロテスタント伝道初期には、中国伝道を経験した宣教師が来日するケースが相次いだ」²⁰⁾が、ランバス親子もそれに相当する。

1886年に南メソヂスト監督教会日本宣教師並びに南美以神戸中央教会の開設と共に、W. R. ランバスは同教会初代牧師並びに総理に任命され、家族と共に日本に渡った。NCHによってこの頃の動向を確認すると、7月23日の兵庫への出発リストに「ランバス夫人と令嬢、及び子供2名」の名があり、9月10日頃にW. R. ランバスとW. H. パークはそれぞれ神戸と横浜に向かう。10月に神戸でW. R. ランバスの妹ノラがパークと結婚。11月24日の神戸行きリストにもW. R. ランバス夫妻と子供が入っている。17日から24日には上海のアレン邸で南メソヂスト監督教会第一回中国年議会が開かれたので、それに参加するため一旦上海に戻ったのだろう。²¹⁾翌年の5月6日の神戸行きリストにも「ランバス夫妻と子供2名」が見られる。上海と神戸を頻繁に行き来する様子が窺える。

19) 「ジャパン・ミッションに関するY. J. アレン監督報告」『関西学院百年史・資料編I』1994年、645-646頁。

20) 石川照子ほか『はじめての中国キリスト教史』かんよう出版、2016年、140頁。

21) 「ウォルター・R・ランバス略年譜」には「11月24日家族と共に北京より神戸に到着」（『伝記』323頁）と記されているが、誤りと思われる。

常にキリスト教への拒否と近代化に迫られるジレンマに陥ったのは、日本も中国も似たもの同士だった。しかし中国の失敗を教訓にした日本は急速に西洋化を進める道を選んだ。ランバス一家が来日した頃の神戸も、外国人居留地として急速の発展を遂げる時期に入り、彼らの活動もスムーズにできたようだ。1891年、W. R. ランバスが日本を離れるまでの功績は、いうまでもなく、1889年の関西学院（Kwansei Gakuin）の創立（初代院長）が筆頭に挙げられるだろう。10月10日で開校式が行われ、W. R. ランバスと5人の教員、及び神学部と普通学部の2部に分かれる19人の学生・生徒によって、神戸東郊（通称：原田の森）の小さな校舎でスタートした学校が、130年あまりの年月を経て、今や数万人の学生を有する日本有数の総合大学に成長したことは、当のランバス本人も想像できなかったのだろう。

一方、父のJ. W. ランバスは広島英和女学校の英語授業を助け、現広島女学院の基礎を築くために尽力した。母は、神戸婦人伝道学校（後にランバス女学院と改称。聖和大学の前身の一つ）を開設した。中国から日本へと場所を変えても、現地の教育に尽力した親子3人の志に変わりはなかった。²²⁾

1892年4月28日、J. W. ランバスは肺炎のため神戸で亡くなり、神戸外国人墓地に埋葬された。上海の英字新聞も訃報を掲載し、12月には*The Chinese Recorder*に追悼文も掲載された。娘婿のパークの同僚である執筆者は、故人の生涯を回顧し、その功績を讃えた。とりわけ上海の「鄭家木橋」のランバス邸は、中国を行き来するすべての宣教師たちにとって、いかに温かいホームだったかを述べた。²³⁾

母のメアリーは一旦アメリカに帰国したものの、まもなく日本に戻り、女子教育に尽力した。1900年に帰国したが、1903年9月に娘夫妻と一緒に蘇州に戻り、そこで穏やかな晩年を翌年の死去まで過ごした。1904年7月1日の*NCH*にはメアリー夫人を追悼する長文、「東方での生活50年：ランバス夫人」も発表された。江

22) 日本でのランバス一家の活動については、『関西学院百年史・通史編Ⅰ』第1-2章、神田健次『W・R・ランバスの使命と関西学院の歛脈』などを参照されたい。

23) H. C. DuBose, In Memoriam, *The Chinese Recorder*, December, 1892, pp. 575-578.

南の古都に入った初の西洋人女性にとって、この街が生涯を閉じるには最善の地であり、葬儀には多くの中国人も参列して涙を流したことが報じられた。²⁴⁾

W. R. ランバスは1891年、妻の健康問題のために渡米したが、のちに南メソヂスト外国伝道局総主事に選任され、南メソヂスト監督教会の海外ミッションの統括者になった。1910年には教会最高位のビショップ（監督）に選任された。日本を離れてから、南米、ヨーロッパ、アフリカ、極東、シベリアと世界各地を回って精力的に伝道活動を続けたが、奇しくも30年後、日本で生涯を終えることになる。

2 逝去に関する報道

1921年夏、シベリア、中国、韓国を経て日本に来たW. R. ランバスは、宣教師会議の三日目に発病し、横浜ジェネラル（現山手）病院で手術を受けたが、心臓病の併発によって9月26日に逝去。10月3日、関西学院で告別式が行われた後、遺体は上海に運ばれた。11日の午後、八仙橋にある外国人墓地で葬儀が営まれ、ランバスは墓地の母の傍に眠ることになった。

ランバスが横浜で手術を受けた時から、上海の英字新聞は既にその容態を報告し、その後も訃報と葬式の詳細について連日のように記事を掲載した。9月29日の*The Chine Press*（1911-1949、『大陸報』）は一面に「ビショップランバスが横浜にて死去、中国生まれ」と題する長編記事を掲載し、その生涯を紹介した。10月15日の*NCH*は葬式に先立ち、ムーア記念堂で行われた追悼式の詳細も報じた。小さなチャペルの床と祭壇は数百の献花に覆われ、喪主である妹のパーク夫人の元、中国や朝鮮を含む各国の宣教師たちが参列した。南メソヂスト監督教会中国宣教部総理のパーカー（F. S. Parker, 1875-1924, 「潘慎文」）は弔辞の中で伝教活動に捧げたランバスの43年間を回顧し、そのうち9年間は医師として中国人の中で過ごし、4年を牧師、3年を副総理、16年を総理、そして12年を監督として費やしたが、一度も休暇をとったことがないと語った。その祖父も曾祖父も牧師であり、両親と

24) H. C. DuBose, Fifty Years in the Orient: In Memoriam. Mrs. J. W. Lambuth, *The North China Herald*, July 1, 1904, pp. 29-30.

彼自身、そして妹の奉仕を合わせると、160年に及ぶ。彼が最も偉大なアメリカ人宣教師の一人であることには疑う余地がないと讃えた。²⁵⁾

翌年に上海の著名な女学校「中西女塾」（1892年、Y. J. アレンの指導により設立）も、学校の紀要にランバスを記念する特集を組んだ。「ビショップウォルター・R・ランバス」と題する追悼文（無署名）は、故人の生涯を回顧し、長年にわたる世界各国での伝導活動を紹介した。また1919年にランバスが久しぶりに極東を再訪したことに言及し、「これらの地域のすべての人々は彼のことを敬愛し、信頼して」おり、「特に素晴らしいのは、30年近くものブランクがあったのに、彼は依然流暢に日本語と中国語を話し、これらの言葉を用いて両地での会議を行っていた」と語った。²⁶⁾1933年、「中西女塾」に増築された新しい校舎も、「ランバスホール」と命名された。

五 再びの中国：激動の時代へ

1 中国再訪の日々

「中西女塾」は「宋氏三姉妹」の母校としても知られている。藹齡（夫が国民政府財務大臣）、慶齡（孫文の妻）、美齡（蔣介石の妻）という三姉妹の父は、アメリカで教育を受けた南メソヂスト教会の宣教師、宋嘉樹（1864-1918、別名宋耀如）であり、前述した1886年11月に上海で開かれた第一回中国年議会によって北米から入会した（『50周年記念刊』、7頁）。従って、W. R. ランバスとも交流があったと思われる。宋はやがて実業家に転身して成功し、莫大な資金を拠出して孫文を支えた人物としても有名である。

ところで、1919年の訪問はW. R. ランバスにとって「30年ぶりのアジア来訪」ではない。「ウォルター・R・ランバス略年譜」には「1907年（53歳）、南メソヂスト全権代表として来日」と書かれている。5月7日のNCDNにも、浙江省湖州の宣教師が土地売買のため現地の人と訴訟を起こし、ランバスの仲裁によって無事

25) Funeral of Bishop Lambuth, *The North China Herald*, October 15, 1921, p. 169.

26) Bishop Walter R. Lambuth, 『墨梯』1922年第5期、146-147頁。

解決された、という記事が見られる。直前の4月25日から5月7日までは、上海でモリソン来華宣教百周年の記念を兼ねて全国宣教師大会が開かれている。共同租界工部局のホール、上海YMCAの殉道堂、南メソヂストの聖三一堂などを会場にして1179人が出席したが、W・R・ランバースも参会していたと思われる。

このように国や教会の違いを越え、中国全土から外国人宣教師が一堂に会して行われた大会は、その時すでに3回目になっていた。1877年5月の初回の大会には父のJ. W. ランバースも参加し、「教会の正式メンバーになるための基準」と題した論文を提出し、アヘン中毒者の参加を禁じるというルールも定めた。2回目は1890年5月にライシャム劇場で開かれたが、²⁷⁾すでに日本に行ったランバース親子が参加したかどうかは不明。3回目の1907年に至ると、科举制度(1905)の廃止により近代教育が大きく発展し、海外留学、とりわけ日清・日露戦争に「勝利」した日本への留学もブームになっていた。

前述のように、中国の近代化に外国人宣教師が大きな役割を果たした一方、キリスト教に対する中国の反応は常に振り子のように、拒否と受容の両極端に揺れ動いた。1900年の義和団の乱は、いわば拒否の頂点に至ったと言えるが、それからの20年間、つまり1911年、清王朝が崩壊し、翌年に孫文を臨時大統領とする中華民国が誕生する前後の時期は、また一転してキリスト教受容の黄金期となった。国を救う手段として多くの知識人はキリスト教を含む「西学」を学んだ。前述したアレンたちの努力はここに来て実ったともいえる。東呉大学(1900)、上海の聖ヨハネ大学(1905)など、著名なミッション系大学の多くはこの時期に創設された。エリート達はそこで学んだだけでなく、孫文本人を含む、民国政府の要人にクリスチャンも多数いた。しかし第一次世界大戦とロシア革命、そして五四運動(1919)によって、西洋文明を積極的に受容する一方、反帝国主義の感情も高まった。また西洋列強に伍した日本も、中国にとって同時に学習と抵抗の対象となった。1919年、W. R. ランバースは外国伝道局にシベリア及び満洲伝道部門を設置し、中国、朝鮮、日本を含む東洋地区伝道の担当監督となり、以降の3年間は毎年この地域を訪問し、シベリア伝道も開始した

27) 羅偉虹編著『中国基督教(新教)史』上海世紀出版集団、2014年、281-318頁を参照。

が、背後にはこのような国際情勢に対する強い関心があったに違いない。

この3年間の行動においても、現地の英字新聞の記事を通して多少知ることができる。1919年、第33回日本宣教部年會主宰のため来日したW・R・ランバスは、軽井沢、東京を経て、神戸を訪問し、関西学院チャペルでも講話した。その時中国も訪問し、9月末に蘇州に数日滞在した後、10月15日に湖州での會議に出席。²⁸⁾翌年は10月19日にムーア堂にて開かれた上海教會の年會で、開幕説教を行った。100人以上が出席し、上海と周辺都市の蘇州、常州、無錫、松江、湖州などの地域から来た代表が3日にわたり様々な報告を行い、日曜日には盛大な礼拝が行われた。²⁹⁾続けて11月に開かれた「広学会」(Christian Literature Society)の年會にも参加した。「広学会」は宣教師たちの出版機構であり、中国の近代教育の発展に重要な役割を果たしている。多くの教會と関連組織のリーダーが一堂に集まった歴史的な會合で、ビショップは「中国はすでにここ1000年で、あるいは有史以来最も素晴らしい覚醒の時期に入った」と語り、改革に必要な具体案も挙げた。³⁰⁾

1920年は、中国の北方5省が歴史的な旱魃に遭い、大飢饉に陥った時期でもあった。W. R. ランバスはウイルソン大統領の特命により飢饉地帯を視察し、救援活動に従事した。彼は上海のアメリカ婦人クラブが主催する會合にも出席し、飢饉の慘状について報告した。

彼は地域の恐ろしい状況について語った。人々は飢餓に苦しみ、植物の根や葉っぱまで食べた。彼らが経過した田野にはほとんど何も残されていない。子供たちも多くの村から消えた。売られたか殺されたかからだと彼は言う。たくさんの子供が井戸に捨てられた。そのため多くの地域の水源が汚染された。もしすぐに巨額な資金が届かなければ、5月までに現地の全人口が減び

28) Bishop Lambuth and Party Visit Soochow (China Press Correspondence), *The China Press*, October 4, 1919, p. 4.

29) Bishop Lambuth Here at Sessions of Conference, *The China Press*, October 26, 1920, p. 4.

30) Christian Literature Society Holds Its Annual Meeting, *The China Press*, November 27, 1920, p. 2.

ると彼は主張した。³¹⁾

着飾ったアメリカの婦人たちが祖国のミュージックやダンスを楽しんでいるパーティーの席上、遠く離れた北方地域の、彼女たちにとっては殆ど無関係だった中国の農民たちの苦しみと恐ろしい惨状を生々しく伝えたランバスのスピーチは、場違いだったと思われたかも知れない。それでも農民たちを救うために必死に訴えたその姿を想像すると、胸が熱くなる。12月23日の新聞には、ランバスがアメリカに戻る直前、教会の委員会から電報を受け、救済のためにすでに25000ドルを拠出する知らせを受けたことも報じられている。

2 ランバスが描いた中国人像

ピンソン著伝記の日本語訳の解説に、1924年に刊行されたこの著作について、田淵結は以下のように述べている。

本書には、当時のアフリカにおけるキリスト教宣教活動についての関心を強く見せるものの、植民地主義への批判的な理解、評価などはほとんど見られず、むしろ二〇世紀第一四半期における北米人のアジア、アフリカ観が、ある意味で率直にうかがえる。先進地域としての欧米と、後発のアジア、アフリカという比較的単純な構図、世界観が、本文中に用いられる個々の表現、用語により、またそれらによる記述全体を通して、随所で明示されている。³²⁾

このようなアジア、アフリカ観が、前述したランバスを哀悼する文章からも見られる。さらにいうと、脱亜入欧を志向する当時の日本でも普遍的なものとなっていた。しかし幼少期から中国人社会の中で育ってきたランバスの中国人観は異なって

31) Woman's Club Gives Folk Music Program: Address on Famine in North Delivered at Meeting by Bishop Lambuth, *The China Press*, December 9, 1920, p. 2.

32) 田淵結「解説」、半田一吉訳『ウォルター・ラッセル・ランバス』、320頁。

いた。英字新聞からは彼の投書もいくつ発見できた。早い時期のものとして、1883年9月4日のNCDNにある「中国人の寛容」は、数年前にW・R・ランバスのもとで働いていたある23歳の中国人の医学生を紹介している。若者は非常に簡素な生活をしていて、一ヶ月の給料はたったの5ドルしかないのに、2年の間にコツコツ貯めていた25ドルの貯金から、23ドルも出して飢饉に苦しんでいる北方の人々に寄付した。「汚い利己心に塗れている世の中で、このような出来事は極めて喜ばしく健康的である」とW・R・ランバスは若者を称えた。³³⁾

前述したように、1919年、W. R. ランバスは日中両国を訪問したが、日本の「対華21カ条要求」に反対する「五四運動」が起きたこの年は、反帝国主義・反植民主義の流れが学生から労働者へと、全国範囲に浸透し始めた時期でもあり、その年の「双十節」（10月10日、中華民国の国慶節）も特別な意味を持つようになった。翌日の英字新聞*The China Press*は、1面と2面に多くの紙幅を割いて上海市民と外国人居留民が国慶節を祝う様子を報じた。その隣に掲載されたのは、「中国の希望は学生にあり。ビショップW. R. ランバスは言う」と題する長文である（副題は「65年前に上海で生まれた宣教師は年会を主宰するために来訪し、新精神の誕生を目撃」）。

無署名だが、執筆者はまず「W. R. ランバスほど中国をよく知り、その変化にも気づいた人は殆どいない」として、その生涯を詳しく紹介した。長いブランクの後の中国再訪は大変刺激的で面白く、長らく滞在する予定だったが、夫人の病気で年



図8 *The China Press* に掲載された記事

33) Walter R. Lambuth, Chinese Generosity, *The North China Daily News*, September 4, 1883, p. 20.

会を終えたらすぐに帰国しなければならなくなったという。そして W. R. ランバスが語った数々の体験の後、中国についての感想も述べられた。変化が大きかったのは四つの都市、北京、天津、南京と上海であるが、最も彼を興奮させたのは組織力の進化だったという。かつては一体感に欠け、役人は貪欲であり、今は鉄道沿線に多くの兵士が見えるほど新しい軍閥体制も加わり国が危険な状態にされているが、W. R. ランバスは学生運動から「異なる精神」を見出した。そして彼の言葉として以下のように記されている。

中国には希望があります。数日前に公共体育場に学生たちの大きな集会がありました。私はそこにおいて彼らのスピーチを聞きました。皆さんも覚えておられるでしょう、当局は道路を遮断しましたが、学生たちはフェンスを越えて集会を行いました。私から見れば彼らのスピーチは実に素晴らしかった。ある天津から来た若い女性は、ものすごいパワーと熱意を持って話したのです。彼女の言葉を二つありのまま翻訳しましょう：まずは「もし我々が精神的に団結できれば、なんでもやり遂げられるのだ」。これこそが中国にとって最も必要なメッセージではないでしょうか？そしてもう一つはこちらです：「両親は私が学生運動に参加することに反対しています。しかし私には祖国が一番大事です！」これはまさに中国女性の素晴らしい進歩の始まりであり、この国は再生するでしょう。³⁴⁾

五四運動は中国の新文化運動の発端になったものの、日本を含む西洋列強からは脅威としか見えなかった。しかも女性は父、兄、夫に従うことを強要された時代だった。女子学生と同じぐらいの「パワーと熱意」で彼女を応援した W・R・ランバスの言葉には驚きを禁じ得ない。同じ記事に見られる、「中国には偉大な将来がある。その国民は何でもできる、文化的にも、物質的にも。彼らはどこでも生きられる、

34) Hope of China is Students, Says Bishop W. R. Lambuth, *The China Press*, October 11, 1921, p. 2.

どんな気候にも耐えられるからだ」といった言葉の数々からも、中国人との一体感がヒシヒシと伝わってくる。また「中国——一つの解釈」というエッセイのなかでも、彼は以下のように述べている。

率直な男らしい強さと忍耐力にかけては、中国人に勝る国民はない。中国人は粘り強く土にしがみついて、ほとんど不屈と言ってもよいくらいである。これらの中国人の一人を肉体的に最も壮健な状態で見ようとすれば、揚子江を舟で遡るか、望むらくは、天津から通州まで白河を遡る旅が必要である。十人から三十人の、衣服をまとわない裸の男たちが堤防の上で風と潮流に逆らって船を引いているのが見られる。彼らはタイタンである。米、豆と粟の素食で、毎日戸外で身体を使うので、彼らは六フィート以上の高さまで、そして隆々たる筋肉と青銅色の皮膚になったのであるが、それほどの風土のそれにも劣らない元氣と強い体力を示しているのである。³⁵⁾

中国が西洋列強に「東洋の病夫」と揶揄された時代に、しかも自国のエリート達にも殆ど無視されていた社会の底辺で生きていた人々を、これほど敬意をもって称えた言葉は少ない。幼少期から父親と共に農村地域を歩き回って、成人してからは医師として長年彼らの生活の中に入っていった体験に負うところが大きかっただろう。従って、砲艦外交を進めた西洋列強に対しても、また武力で台湾・朝鮮を植民地にし、中国大陸にも「進出した」日本の動きに対しても、W. R. ランバスの反応は、その中国と朝鮮論を見ると、抑圧された側に立っていたこともある。³⁶⁾『医療宣教』の中にも以下のような記述が見られる。

35) W・R・ランバス「中国——一つの解釈」（保田正義訳）『ウォルター・ラッセル・ランバス資料』関西学院キリスト教主義教育研究室、1980年、25頁。

36) 詳しくはW・R・ランバス「中国——一つの解釈」「日本雑記」（『ウォルター・ラッセル・ランバス資料』）、「朝鮮雑記」（『ウォルター・ラッセル・ランバス資料（2）』）（関西学院キリスト教主義教育研究室、1984年）を参照されたい。

個人の発見——それはキリスト教による発見であるが——以来、民族主義の精神だけでなく、人種間の兄弟的性格を現実のものにさせようとする世界的意識もまた、着実に成長してきた。隣人という意識は、人々の居住するあらゆる地域の間ですでに存在している。(中略)しかし、それに兄弟という意識がなければ、隣人らしさのない隣人関係となって、摩擦や抗争が増大することだろう。³⁷⁾

ランバスが逝去した時に、関西学院の三代目院長であるニュートン博士は弔辞の中で、その指導者としての性格と原動力の根源が、「人間に対する燃えるような愛」だったと述べた。彼は「人種、国籍、宗教の区別なく」、「すべての人を愛」する「世界全体の市民」だった。とりわけ「東洋をよく知り、東洋人の心をよく理解」し、「この人たちを自分の同胞として愛し、共感をもってい」たランバスにとって、「日本人、朝鮮人、中国人は彼にとって兄弟であり、姉妹」だったという（『伝記』、259-260頁）。しかし上述のランバスの言葉は、もはや「兄弟という意識がな」く、東洋アジアの「隣人」に「摩擦や抗争」をもたらした当時の日本帝国を指して語られた言葉に聞こえてならない。

結び

近代における欧米諸国によるアジアでの伝道活動は、アヘン戦争が象徴しているように、砲艦外交とアヘン貿易、そして度重なる不平等条約の締結という、植民地侵略を前提にして行われたのである。それと同時に、「西洋の衝撃」がアジア諸国に近代化をもたらし、西洋文化の伝播においては宣教師たちが大きな役割を果たしたことも否めない。その両面性が、常に激しい拒否と受容の双方を生み出した理由でもあり、こと中国においては振幅が大きかった。義和団の乱で拒否が頂点に達したものの、その後の20年間は中国キリスト教の黄金期だったことは既述の通りで

37) W・R・ランバス、堀忠訳『医療宣教：二重の任務』、関西学院、2016年、191頁。

ある。しかも孫文に続き、蔣介石もクリスチャンとして知られており、妻宋美齡の父の関係もあったろうか、南メソヂスト教会の中国での勢力もかなり拡大した。1947年、「中華基督教衛理公会」が、中国伝教百周年を記念する行事を大々的に行い、その記念刊には蔣介石夫妻も祝辞を寄せた。前述した『50周年記念刊』に収録された中国宣教部の歴史や、主な宣教師たちの略伝も再録された。³⁸⁾

しかし中華人民共和国が成立した後、外国人宣教師が駆逐され、1952年には全てのミッション系学校及び病院が併合され、姿を消した。文化大革命に至ると、多くの信者が迫害を受け、ランバスの遺骨も転移された際に紛失した。租界とキリスト教は、植民地侵略の象徴として長年否定されていた。やがて1980年代以降の改革開放に伴い、過去の歴史への反省と再評価が行われるようになった。またかつて併合されたミッション系学校と病院の殆どが、実は国の教育と医療の根幹となり、筆者を含む多くの人々がその果実を享受してきたことも、すでに周知の事実となっている。21世紀に入ってからの中国キリスト教の発展は、教会の建設と規模も、信者の人数も、共に再び日本とは「比較にならない」ほど、拡大の一途を辿るが、それに対抗して拒否の動きもまた見られ始めている。

こうして歴史を振り返ると、拒否か受容かのどちらか一方のみを評価し、あるいは「西洋人宣教師」を一括りして、みな植民地侵略を擁護した者として断罪するのは客観性に欠けている。ヤング・アレンのような、中国の近代化に確実に貢献した宣教師もいたし、民族や身分を超えて世界の人々を兄弟や隣人として見ていた W. R. ランバスの世界観は、根底にキリスト教が唯一無二である信仰があったとはいえ、評価に値するだろう。そしてその世界観を形成させた原点は、上海の「鄭家木橋」にあったのではないかと思われる。すなわち西洋列強の植民都市であった上海という、多種多様な文化が交差、交流、または激しく衝突し、時には煉獄と化した厳しい環境の中で揉まれて育った経歴こそが、「世界市民」としての W. R. ランバスを生み出したといえよう。

38) 『中華基督教衛理公会百周年記念冊』、1947年、上海図書館所蔵。

図版出典

- 図1, 3, 5-7 『中華監理公会年議会五十周年記念刊』、1935年
図2 村松伸・増田彰久『図説上海 モダン都市の150年』(河出書房新社、1998年)、20頁
図4 Ch. B. メボン著、倪静蘭訳『上海法租界史』(上海社会科学院出版社、2007年。原著初出は1929年)、83頁
図8 *The China Press*, October 11, 1921, p. 1.

主要参考文献

- ウイリアム・W・ピンソン著、半田一吉訳『ウォルター・ラッセル・ランバス』関西学院大学出版会、2004年
神田健次『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉉脈』関西学院大学出版会、2015年『関西学院百年史・通史編I』1997年
『ウォルター・ラッセル・ランバス資料』関西学院キリスト教主義教育研究室、1980年
『ウォルター・ラッセル・ランバス資料(2)』関西学院キリスト教主義教育研究室、1984年
『中華監理公会年議会五十周年記念刊』1935年、『中華基督教衛理公会百周年記念冊』1947年(共に上海図書館所蔵)
深澤秀男『中国の近代化とキリスト教』新教出版社、2000年
王立新『美国传教士与晚清中国现代化』天津人民出版社、1997年
羅偉虹編著『中国基督教(新教)史』上海世紀出版集團、2014年
The North China Herald, The North China Daily News, The China Press (関西学院大学図書館、上海図書館所蔵データベース)